

研究報告：秋田大学医学部保健学科紀要13(2)：31-39, 2005

## カプグラ症候群と永井の〈私〉論（その1） —〈私〉論への批判で他者の〈私〉は確保されたのか—

新 山 喜 嗣

### 要 旨

筆者は、これまでカプグラ症候群の本質規定にあたって、本症候群では他者において「このもの性」としての〈私〉の変更が行われるものとする小論を発表してきた。しかし、本来は自分自身のものである〈私〉が他者においても存立するか否かという問題について、それらの小論では十分な検討がなされないまま議論が進められていた。したがって、本稿では他者における〈私〉の存立の是非に焦点を当てた検討を試み、同時に、カプグラ症候群で変更する〈私〉がもつ存在論的な意味についても検討した。

最初に、ここで意図されている〈私〉概念を最初に提起した永井均の所論から、他者における〈私〉の存立を否定する彼の主張を概観した。永井によれば、〈私〉とは自分自身だけがもつ唯一性であって、それが誰もが持ちうる唯一性一般に歪曲されることは許されないことであった。続いて、このような永井の他者論に対して否定的な見解をもつ3名の論者による主張を概観した。しかし、これら論者の主張においても、他者における〈私〉の存立が十分な根拠をもって確保されているとは言い難いものと思われた。したがって、カプグラ症候群に関する先のような本質規定が妥当なものであるためには、他者での〈私〉が存立するための根拠を、異なる視点から新たに探し出すことが必要であると思われた。

### I. はじめに

筆者はこれまで発表した小論<sup>12, 13)</sup>において、カプグラ症候群<sup>脚注1)</sup>にて妄想対象となった人物で入れ換わる当のものは、人物に付帯する属性の束としての「私」とは区別される「このもの性 (haecceity)<sup>4, 15)</sup>」としての〈私〉であるという主張を、哲学者永井均<sup>8, 9, 10)</sup>の〈私〉論に仮託しつつ提出してきた。これは、カプグラ症候群をもつ患者の中には外見、性格、役割といった人物がもつ全ての諸属性の差異を認めないまま、にもかかわらず、その人物の同一性を否認するような患者が存在し、そのような患者をカプグラ症候群の純型とみなして検討を進めることが本症候群の本質規定には有効であるとの考え方に基づいていた。

しかし、このような筆者のこれまでの主張に対して、その後、多くの識者・学兄から疑問と批判を頂戴した。それらの多くは、筆者の小論における議論で仮託した永井均の〈私〉概念の取り扱いについてであり、小論では永井の〈私〉概念が恣意的に拡大された上でその援用がなされているとの指摘であった。それを概略すると、「永井の〈私〉は元来より自分自身の〈私〉にのみ適用される概念であり、他者における〈私〉の存立を永井自身が否定している。にもかかわらず、筆者の小論では他者の〈私〉を当初より存立可能なものとして持ち出し、その上で、カプグラ症候群をそのような他者の〈私〉が変更するものとして論じている。したがって、そのような論法をとることは、永井の〈私〉概念を正しく理解する限り適切でない」という

秋田大学医学部保健学科作業療法学専攻

Key Words: カプグラ症候群  
永井の〈私〉論  
他者  
同一性  
個体

指摘であった。ここで確認をすれば、もとより、筆者がカプグラ症候群にて変更をとげるとする〈私〉は、永井均の提起した〈私〉概念による〈私〉とは後述するような重要な点で異なるものであった。もちろん、筆者の〈私〉という表記法は永井に倣ったものであり、そこで使用される〈私〉も、永井による〈私〉と‘属性を欠如する’ことから始まるいくつかの共通点をもつものである。しかし、筆者が使用する〈私〉は、ある地点から永井への正確な追随より意図的に逸れていることは疑いない。筆者の小論<sup>12)</sup>においてもこの点に関する簡単な補説はしておいたものの、にもかかわらず筆者による〈私〉の使用が永井の意図に背いているとの批判が向けられるとすれば、永井とは異なった筆者独自の〈私〉概念が正当な理由をもって成立しうるものではないとの見解が提出されていると考えるべきであろう。

このように、〈私〉概念はその解し方に慎重な配慮を要するにもかかわらず、これまでの筆者の小論では、そこで仮託した永井の〈私〉論に関する検討を相当に簡略して行っており、また、筆者がカプグラ症候群で入れ換わるとした他者の〈私〉についても充分な概念規定がなされないまま終了していた。したがって、本稿では以前の小論<sup>12), 13)</sup>において議論が不充分であった他者における〈私〉の存立の是非を中心に検討をし、そのような手続きを経ることによって、カプグラ症候群で変更する〈私〉が如何なる存在論的な意味を持ちうるかという問題について考察を進めることにしたい。このような目的に沿うために、本稿では次のような順にて論述を進めることとする。まず、次章のⅡ章にて〈私〉論に関するこれまでの展開を概観するが、その第1節では永井が意図する〈私〉論について、中でも筆者との相異がきわだつ他者における〈私〉の存立の是非に関する部分を中心に確認したい。次に、同章の第2節にて、永井の〈私〉論に対してこれまでになされた3名の論者による代表的な批判を紹介するが、こ

れら論者の中心的な論点はいずれもが偶然にも、あるいは当然のことながら、永井がその存立を否定する「他者の〈私〉」の問題に直接的な関わりを有している。Ⅲ章では、このような〈私〉をめぐるこれまでの議論によって、他者においても〈私〉が存立しえる途が確保されたか否かについて検討する。これらⅡ章とⅢ章は、Ⅳ章から始まる一連の議論への予備的考察の性格をもつ。そして、Ⅳ章で行う議論を踏まえながらⅤ章に至って、他者において〈私〉が存立しえることを示す予定であるが、そのことによって、〈私〉概念がカプグラ症候群の理解に寄与しえることを改めて示したい。また、ここでは同時に、個体、同一性、世界、偶然性といった伝統的な形而上学的概念がもつ座標軸の上で、他者での〈私〉がどのような位置を占めるかという点も検討してみたい。最後にⅥ章にて、他者における〈私〉をカプグラ症候群という病態の上に照らし出したときに、そのような〈私〉が如何なる存在論的な意味をもつかということについて検討したい。

## Ⅱ. 他者の〈私〉をめぐるこれまでの展開

### 1. 永井の〈私〉論における他者

永井の〈私〉論にとって、人物に付帯する属性の束としての「私」と区別される〈私〉とは、あくまで自分自身のこの〈私〉であって、任意の人物であることを拒むような唯一性のレベル（永井はこれを「単独性」のレベルと呼ぶ）をもつことはもとより、そのような唯一性自体が誰にとっても唯一性に一般化されてしまうことをも拒むようなレベル（永井はこれを「独在性」のレベルと呼ぶ）をもつとされる。永井は次のように云う。—それゆえ、独在性は伝達可能な単独性水準からの絶えざる逸脱・離反という形でしか自己を示すことができない。ここにいたって単独性と独在性の拮抗はきわめて力動的なものとなる。—<sup>10)</sup> このように、永井によって〈私〉の唯一性が限りなく純化されると

脚注1) カプグラ (Capgras) 症候群とは、身近にいる人物について「顔かたちはそっくりだが別の人物に入れ替わっている」と患者が訴える特異な妄想である。このとき、妄想対象となった身近の人物は、患者にとって本物に成りかわったにせものとされることになる。本症候群は、一連の症状からなる組合せではないことから、「症候群」という名は本来は適切ではなく「カプグラ症状」とするべきとの意見もあり、また、妄想対象が人物に限定さ

れているとすれば本症候群の別名である「ソジー (sosie) の錯覚」の方がむしろ適切かもしれない。ただし、従来より多くの症例報告で「カプグラ症候群」の名が使用されてきた経緯があることから、拙稿でもこの慣例に従うこととした。本症候群は国内外で300例を超える報告がなされているが、臨床で遭遇したとしても症例報告をしない医師が多いことを考慮に入れると、世に棲む患者は実際には相当な数に登るものと推測される。

き、その純化の過程で他者の問題が浮上し、同時にこの他者は絶えず排除され続けるべき対象となる。なぜなら、「独在性」のレベルとしての〈私〉は、それが伝達されようとするればどの〈私〉にも妥当するような「単独性」のレベルとしての〈私〉に読み換えられることから、この読み換えとしての「変質・頹落」への抵抗として唯一性の純化の運動が絶えず行われる必要がでてくるからである。このとき他者の存在は、唯一の〈私〉がそれら他者にも妥当するものとして一般化される可能性を提供するものであり、本来の〈私〉が「単独性」のレベルへと変質するのをいざなうものである。したがって、「独在性」の〈私〉がこの変質に対する拒絶によって維持される限りは、他者は「独在性」にとって常に否定的な契機とならざるをえないのである。

ここで永井は、従来の独我論がどの〈私〉にも適用される一般化された独我論であるとして、自らの〈私〉論におけるこの〈私〉にのみ適用される独我論をそれらから区別しようとする。ところで、このとき彼の独我論の主張によって、逆に他者がいったん必要なものとして要請されるかのように見える地点がある。— … 〈私〉の独我論は、それにしたがえば本来存在しえないはずの他の〈私〉の存在を暗に前提したときにのみ、語りうるものとなる。（傍点永井）<sup>9)</sup> 〈私〉が独りであることを「図」として浮き立たせるためには、同型性をもった多くの「他の〈私〉」の存在が「地」となるものとして必要となるのである。ただし、ここでの「他の〈私〉」は、この〈私〉を原点としてそこから開かれている世界の中に登場するような対象ではなく、永井によればこの〈私〉と同じく「そこからも世界が開けている」もうひとつの世界の原点であるとされる。—他の〈私〉は、つまり他者は、〈私〉についてそれについてだけ語ろうとする意志の内部で、その意志が産み出す意味作用の不可避的な副産物として、ただ非主題的にのみかいま見られる。（傍点永井）<sup>9)</sup> このような「かいま見られる」ものは独我論を語る時、そのときに限ってかろうじて示されるものにすぎず、永井は「他の〈私〉」の存立をこのような

否定的なあり方以外には認めていない。永井が、〈私〉から開かれる世界と「他の〈私〉」から開かれる世界について、—それぞれの並行世界は、相互に重なりあいながらも、無限の距離によって隔てられている。—<sup>10)</sup>と述べるのも、この否定的なあり方をよく示している。永井にとって「他の〈私〉」がこの〈私〉の世界の中に登場することはあり得ず、かくして、「〈私〉には隣人がいない」と宣言されることになるのである<sup>脚注2)</sup>。

以上、永井の〈私〉論が他者について語っていることを概観してきた。ここにおいて、カプグラ症候群を患者にとっての「他の〈私〉」の変更とする筆者の前稿に対しては、永井の所論に忠実である限り批判や疑義が向けられるのは当然であり、寄せられた批判や疑義は概ね次の4点にまとめられる。①カプグラ症候群を呈した患者における「自分の〈私〉」の隣人として、妄想対象となった人物の「他の〈私〉」が同一の世界に存在することはありえない。②カプグラ症候群の妄想対象となった人物にも〈私〉を認めることは、〈私〉のもつ自他の非対称性という性質に背くものである。③そもそも「他の〈私〉」を認めることは唯一性が複雑性を帯びるという矛盾であって、〈私〉が固有性一般に変質した事態である。④永井の意図とは異なった〈私〉概念の使用をしているにもかかわらず、永井の表記をそのまま倣って〈私〉と表記するのは不適切である。以上の4点の批判・疑問のうち、①と②に関しては結局は③に帰すると考えられる。そして、永井の意図に浴おうとすれば、本筆者への③の批判は至当であることをここで断わりたい。しかし、永井の〈私〉論においてはとくに他者論に関する限り、永井の意図をはみ出す微妙な点を残しており、その問題をⅢ章以降の一連の議論において検討するが、その前に本章の次節において、現在までに提出された永井の〈私〉論への代表的な批判を紹介することによってそれをⅢ章以降での議論への伏線にしたい。ただし、上記の④の批判・疑問は他と水準を異にしているのので、ここにて回答をしておく。すなわち、次節で述べるように、筆者に限らず永井の〈私〉論には幾つかの異論が提出さ

脚注2) このように、永井の〈私〉論では、独在性から単独性への変質の問題と、独我論が語られるときに生じる問題という、2つの独立した経路から「他者」の問題が発生していると考えられる。しかし、この別々の経路から発生した「他者」同士の間違について、永井によってはとくに触れられていな

い。もし、このように別々の経路から発生した「他者」が根拠もなく一致することに、別段異和感を覚えない永井の読者がいるとすれば、それは、それら読者による他者の実在への抜きがたい信憑によるもののように筆者には見えてしまう。

れている。しかし、それらは永井の〈私〉論を中心としてその円周をなすかのように、いずれも、近代における人間主体一般としての「私」概念を踏襲していないという点では共通している。これら一連の議論の発端を作った永井に敬意を表するとともに、異論は多様であったとしても中心的論点は離散すべきではないという観点から、あえて〈私〉という表記をそのまま使用した。

## 2. 永井の〈私〉論へのこれまでの批判

永井による〈私〉をめぐる一連の考察<sup>8, 9, 10</sup>に対しては、このことを中心的な論題としたものから評釈としてわずかに触れたものまで、現在まで多くの論者が言及している。もっとも、永井の〈私〉論の主軸をなす「独在性」の概念が当初から誤った理解がなされた上でその〈私〉論への批判が行われていると永井が考えたいくつかの論考<sup>14, 17</sup>に対しては、永井自身が自らの著述<sup>10</sup>の中で逆批判を展開してきている。しかし、本稿でここに紹介をする3名の論者による永井批判は、永井の主張する「独在性」に対していったんは一定の理解を示しつつも、その上で、永井の〈私〉論に対する批判的検討を通じて自らの〈私〉概念を構築する作業を試みたものばかりである。そして、前述のようにいずれの論者においても、永井が否定した他の〈私〉の存立をどのように考えるべきかという問題との接点上でこの作業が行われている。

尚、ここで確認をしておく、当然ながら拙稿の目的はあくまで、カプグラ症候群の本質規定を他の〈私〉の変更とする筆者の立場の根拠を確保することにある。決して、その目的が、ある問に関わる哲学上の論壇の、本邦における現況を読者に紹介することにあるのではない。しかし、永井の〈私〉論に対して提起されたこれら3名の批判は、批判が提出されたという事例的な出来事につきないものがある。それは、これらの批判は、永井の〈私〉論に対していったんは提出されるべき範例となる批判とも考えられるものだからである。したがって、これら3名による批判を吟味することは、カプグラ症候群に対する本質規定の立脚点を確保する上で避けて通ることのできない重要な作業であると考えられる。

(1) 勝守真による批判<sup>16</sup>：勝守は永井の〈私〉論の中核にある、自分の〈私〉の他者に対する存在論的・方法論的先行性に疑念を表明する。とくに矛先が向けられるのは、〈私〉のもつ偶然性と奇跡性が他者の媒介なしに成り立つとされる点である。

ここで概説しておく、永井による〈私〉の偶然性とは、自分の〈私〉が世の中の人間のうちの

誰と結合しているかは何の必然性もないにもかかわらず、現実には永井均という具体的な一人の人物と結合していることの偶然性である。また、〈私〉の奇跡性とは、世の中の人間のどれもがこの〈私〉でないこともできたはずであり、それにもかかわらず現実にはこの〈私〉が存在しているということの奇跡性である。永井はこのような偶然性と奇跡性を、次のような状況を想定することによって際立たせている。それは、永井均がある日突然にこの〈私〉でなくなるというような想定である。このような想定においても、—永井均は依然として存在し、この論文を書き続けている。…部屋に入って来た彼の妻は、彼といつもと同じように会話をし、何の不審も抱かないであろう。—<sup>9</sup> 永井は続けて言う。—私自身にとって、この想像は有意味である。しかし、この想像が有意味なのは、私自身にとってだけなのである。他の人々は、永井均に起こったこの〈異変〉に、何の意義も認めることができない。—<sup>9</sup>

このような永井の叙述に表われる〈私〉に関する異変の有意味性を、勝守はその異変が認識されるか否かということとして読み取る。すなわち、勝守によれば〈私〉に関する異変が自分だけに意味であって他者にとっては有意味でないということは、〈私〉に関する異変が他者によって認識されないということの意味するのである。さらに、勝守にとって〈私〉がもつ偶然性と奇跡性はこのような有意味性と重なり合うことであり、それ故に、〈私〉の偶然性や奇跡性がそのような偶然性や奇跡性であり得るのも、先のような異変が他者によって認識されないということに基礎づけられるとされるのである。ここで、勝守が自らの論点として強く主張することは、〈私〉に関する異変が他者によって認識されないことは、自分が自分自身の中だけでけっして知り得ることではなく、「認識されない」という「他者の語りを聞く」ことによって初めて知られることになるという点である。つまり、かの異変が他者によって認識されないことは、他者が語り、自分がそれを聞くという対他関係の媒介を待って始めて自分が知るところとなるのである。かくして、勝守によれば自身の〈私〉がもつ偶然性と奇跡性は他者の語りを聞くという他者との関係にその始源から巻き込まれていることになり、永井の〈私〉論がもつ自身の〈私〉の他者に対する先行性はそこでくつがえされることになるのである。

(2) 森岡正博による批判<sup>17</sup>：森岡による永井への反

論はいたって簡潔であり、それは、永井が独在性としての存在者に対して〈私〉という不適切な表記法をとったということにつきる。森岡は「私」と「他者」という2つの概念は相互に依存し合っており、私という表記をすれば必然的に他者の存在が前提とされてしまうと指摘する。つまり、私という言葉のもつ意味論的な制約が、独在性とは元来より無縁なはずの他者を登場させてしまうというのである。一独在的存在者を指し示すのに〈私〉という表記を用いることで、永井は自ら仕掛けた罠に陥って行く。<sup>7)</sup> よって、森岡によれば〈 〉の中に「私」以外の適当な言葉を放り込むことにより、他者の存在を暗に措定してしまうという不必要な事態は避けられるというのである。

このように、森岡は独在性のレベルから他者の存在をより徹底的に排除する方法を提案する。しかし、その一方で森岡は他者について、「他者」は他の〈私〉として登場するのではなく、独在性のレベルについてその議論を可能にするこの公共的な性質という形に変質して、登場するのである。<sup>7)</sup> と語り、「独在性」に加えて新たに「共同性」のレベルが人称的世界を構成するために必要であると宣言する。そして、森岡は「独在性」と「共同性」の両者の関係は「互いに独立変数」とあるとする。ただし、「共同性」に関するそれ以上の素描もないまま、先の宣言の直後に筆が折られている。

- (3) 入不二基義による 批判<sup>2, 3)</sup>：唯一無二の存在としての〈私〉に至るアプローチの仕方に関して、永井が〈私〉のもつ偶然性・奇跡性というある種の形而上学的直観を出発点にするのに対し、入不二は「私」という語の働きに関する形式的・論理的な議論を出発点とする。すなわち、入不二によれば「私」という語には、その語の発話者である個体を指示する働きとしての「個性」のレベル(私<sub>1</sub>)<sup>脚注3)</sup>と、その語の発話者自身への再帰的關係を表出する働きとしての「形式性」のレベル(私<sub>2</sub>)の2つがあるとした上で、さらに、これら2つのレベルとは異なる「単独性」のレベル

(私<sub>3</sub>)を暗示するという3つ目の働きがあると云う。「単独性」のレベルとは、具体的には「或る自己意識が、入不二の中に在る。」と「他ならぬこの自己意識が、入不二の中に在る。」という云い方であって、後者の場合にだけある「この性」がまさに「単独性」を暗示するという。ただし、入不二によれば、ここで注意すべきこととして、暗示という言い回しがすでに示しているように「この私」によって単独性を指示しようとしても、すぐにその「この性」はこのという限定を無限に付加し続けられない限りは、一般化された個性性と形式性のレベル(私<sub>1+2</sub>)の「私」に回収されてしまい、直接には「単独性」(私<sub>3</sub>)を指示することができないとしている。この点では、入不二の「単独性」(私<sub>3</sub>)は永井の「独在性」(私<sub>4</sub>)にきわめて近接しているものと思われるが、ただし、入不二は以下の点で永井に異論を唱える。

異論の一点目は、永井が「独在性」を示すにあたって、一般化としての変質からの絶えざる離反という一方向性の運動のみを重視する点に向けられる。すなわち、入不二によれば、永井のような「個性・形式性」(私<sub>1+2</sub>)→「単独性」(私<sub>3</sub>)→「独在性」(私<sub>4</sub>)という唯一性の強度が増す方向の運動だけではなく、逆にその強度が減る方向の運動があることによってこそ「独在性」が示されうるといふ。一変質と遡行という〈対〉関係が本質的なものであり、一方のみを純化することは不可能である。<sup>3)</sup> 入不二にとって私<sub>3</sub>は私<sub>1+2</sub>と私<sub>4</sub>の間隙にあつて「中間的・二重的」な特性をもち、この私<sub>3</sub>の二重性をもつ両方向性の運動としての緊張関係の中で私<sub>4</sub>はかろうじて示されることになる。このことは、先に森岡が触れた独在性としての存在者の表記法についても関連をもつことになる。入不二は、独在性の表記が〈私〉であつて例えば〈φ〉でないことの回答として、一私の単独性がつねにすでに私の個性・形式性に変質しているということは、逆に「変質」という動きの中につねにすでに私の単独性が読み込まれていることである。<sup>1)</sup> と云う<sup>脚注4)</sup>。入不二にとつ

脚注3) ここで使用する私<sub>1</sub>、私<sub>2</sub>、私<sub>3</sub>、私<sub>4</sub>という表記法は、永井が入不二の批判に対して逆批判を展開した論文<sup>10)</sup>の中で使用されたものであるが、入不二もこの論文への応答<sup>3)</sup>の中でその表記法を踏襲していることから本稿でもそれに倣うことにする。

脚注4) 入不二は「単独性」という言葉を「独在性」と区別しないで使用することがしばしばあるが、とくにこの箇所では「単独性」という言葉を「単独性」のみならず「独在性」の意味に置き換えてもその主張は維持されうると考えられる。

て、私<sub>1</sub>から私<sub>2</sub>までの間で作られる一連の関係は私の場で生起する両方向への「ずれ」としてとらえられ、それ故に「独在性」といっても一方向へ完全に昇華されてしまうことのない不純性をもつことから、「独在性」に対して‘私’という表記が使用されるのは決して不自然なことではないとされるのである。

入不二の永井への異論の二点目は、永井が「独在性」としての〈私〉は「言語ゲーム」(Wittgenstein, L.)<sup>16)</sup> 的合理性から絶えずはみ出るものであるとする点に向けられる。入不二は、このような言語ゲームからの超出に関する叙述自体がもう一つの言語ゲームを形成しているとし、あくまで「独在性」としての〈私〉を言語ゲームの中に含み込もうとする。そして、このことにおいて他者への戸口を開けることを試みる。すなわち、入不二は、各人が同等に固有性を共有しあう場である「社会的言語ゲーム」に対して、かけがえのない絶対的な固有性を私と他者間で保存し合う場を「エロスの言語ゲーム」と呼び、後者の実相を記述しようとする。彼によれば、エロスの言語ゲームにおける他者の「高次の固有性」は、私の「単独性」と相関することによってその私の「単独性」から支えられているという。一方、私の「高次の固有性」も同様に他者の「単独性」に支えられているはずあり、そのようなものとしての他者の「単独性」はすでにエロスの言語ゲームにおいて前提とされているという。このように、他者の「単独性」は、エロスの言語ゲームの中で私の「高次の固有性」を照らしだすいわば虚焦点として、他者の中に読み込まれているとされるのである。

### Ⅲ. 〈私〉論への批判が向かう隘路

拙稿の目的は、自分がいる世界に他の〈私〉も存立しうるか否かという問に対して、一定の回答を示すことにある。これは、とりもなおさずI章で紹介したカプグラ症候群を他の〈私〉の変更として捉えることへの疑問や批判に対して、そのように捉えることの妥当性の根拠を確保しようとする試みでもある。当然のことであるが、他の〈私〉が自分自身の〈私〉と同一の世界に存立し得たときにのみ、カプグラ症候群をそのように捉えることの妥当性に途が開かれることになる。なぜなら、カプグラ症候群を呈した患者がいる世界にもしも患者自身の〈私〉のみが存立してそれ以外に他の〈私〉が存立しないのであれば、患者にとっての他

者において、その他者を占有する〈私〉が変更することは元々あり得ないことになるからである。

自分の〈私〉が一定の人物と結合していることに異変があったとき、このような異変は私自身にとって有意義なことであって他者にとっては有意義なことでないことの理由として、永井はそれが他者からはこのような異変が気づかれないことであることを自らの論考の中で幾度か述べている。勝守が〈私〉の存在の偶然性や奇跡性について、知りうるか否かという問題に関連させて論じたのも、このような永井の記述に添ったものであり、それ自体は自然なことであると思われる。しかし、永井は一方で次のように述べている。—たとえば今晚寝て起きると、あるいは次の瞬間にも、私であるこの人物が、物理的同一性と心理的継続性を維持したまま、私でなくなってしまう、ということが考えられることになる。考えられる、と私は思う。だが、それが起こったとき、それが起こったことを知る主体はもうどこにもいない(傍点筆者)。(中略)しかし、今晚これからそれがおこることを恐れることには意味がある、と私は感じる(傍点永井)。—<sup>17)</sup> このように永井は、将来に起こる自身の〈私〉に関する異変が現在の自分自身にとって有意義であることを述べているが、さらに、将来の自分自身にとってもやはり有意義であることをそこで述べているように筆者には思われる。そのような場合、〈私〉に関する異変をそのときに知りうる主体がいなくてもやはりそこに有意義性は発生しうることを意味し、したがって、私自身にとっての変更の有意義性は、その変更を私自身が知りうるか否かという問題とは無関係な事柄であるということになる。そもそも、〈私〉に関する変更の有意義性の有無は当初から存在論的な問題であったはずであり、したがって、それは変更がわかるか否かという認識論的な問題とは別個の問題として扱われるべきはずなのである。そして、〈私〉が一定の人物であることの偶然性や〈私〉が存在したことの奇跡性も、やはりそれは有意義性の問題と接続する存在論的な問題であり、それを知りうるか否かということとは別個の問題であると考えられるべきなのである。このような思路に立つ限り、勝守が指摘する「異変に気づかないという他者の語りを聞く」ことの偶然性や奇跡性にとっての意義は、そこで消失せざるを得ないことになる。そして、勝守によって示された他者へと至る道筋も、ここに来て途絶することとなる<sup>脚注5)</sup>。

一方、森岡は前述のように当初から他者の存在を根底より排除しようとし、〈私〉という表記さえもが、私の対概念である他者を暗黙裏に呼び込む不適切な表記であるとしたのであった。しかし、「独在性」とし

での存在を表す〈〉の中には存在を示す何らかの言葉が入らなければならず、たとえ森岡の言うように〈私〉という表記が不適切であるとしても、読者はその不適切さを念頭に置きつつ読めばそれで事足りるのである。そしてそのようなときには、永井が「独在性」の真の意味を読者に伝達することに成功しているとも云えるのである。問題は、森岡の意見に反して〈私〉がその表記が適切なものとして意図的に使用された場合であり、このような場合に不用意に他者が要請されてしまうか否かである。たしかに、意味論的問題の取扱いが存在論的問題と深く関わり合うことは場合によってはあり得るものと考えられる。しかし、森岡の危惧は言葉の概念がもたらす他者の問題にあくまで議論はとどまっておき、その限りでは、存在論的に他者をどのようにとらえるべきかという問題とは常にすれ違うもののように思われる。したがって、たとえ意図的に〈私〉という表記が使用されたときにも、森岡の危惧にもかかわらず他者の存在自体は暗黙裏にさえ措定されることがないものと思われる。また、他方で、森岡によって他者がそこに登場すると予告された「共同性」という概念についても、筆者の知る限りでは現在まで森岡自身によって素描さえされていない。結局、森岡の論考の中には、他者の存在について直接に触れる議論は今までのところ何も含まれていないように思われる。

勝守のような認識論的なアプローチや、あるいは、森岡のような意味論に限定したアプローチとは異なり、入不二のとった方法は、私の指示に関わる形式的な議論を出発点としながらも、常に存在論的な〈私〉の問題を背後に控えさせていたものと考えられる。例えば、入不二によってなされたなぜ〈私〉であって〈φ〉ではないのかといった議論も、森岡のような純粋に意味論的問題としての議論ではなく、実質を何ら持たないよう見えるものがなぜ〈私〉として「私」によって充実させられているのかといった存在論的な問題への回答であったと考えられる。

ただし、一方で入不二は、〈私〉の唯一性の純度に関する「個性性・形式性」⇔「単独性」⇔「独在性」という一連の運動を、「独在性」の出自に関わる存在論的な問題として捉えるのではなく、このような運動は「独在性」の示し方の問題であるとも述べる。すな

わち、〈私〉に関する両方向性の運動は永井とは異なるもう一つの「独在性」の示し方にすぎないとして、自らの主張を相対化させる論調も見せるのである。入不二は、彼の「独在性」の示し方を「類比的な指し示し」と呼び、永井のそれを「説明の拒絶」と呼んで次のように云う。—「類比的な指し示し」と「説明の拒絶」との対立は、実は、同一平面上の対立とは異なるものである。それは、同一の言語ゲーム内での「事実」をめぐる対立ではなく、同一の「謎」をめぐる異種の言語ゲーム間のずれなのである。—<sup>3)</sup>しかし、このような入不二の陳述にもかかわらず、入不二と永井の両者による「独在性」の示し方の間で、それぞれが参入する言語ゲームについて、入不二が指摘するほどの差違はそこにはないように筆者には思われる。なぜなら、永井にしても入不二のように私の唯一性に関していくつかの水準があることを認めているからこそ、「独在性」に至るためには唯一性の減弱としての「変質」からの絶えざる「離反・逸脱」が重要であることを強調する必要があったものと考えられるからである。したがって、〈私〉の唯一性に関わる運動について、永井のように一方向性を主張するかあるいは入不二のように両方向性を主張するかの違いについては、言語ゲームの異種性どころか、同一の言語ゲーム内での主張の差違としても、「独在性」としての存在者を理解しようとする上で意味のある差違には見えないのである。それでも、その差違こそが重視されるべきとの主張があるとすれば、それは、「独在性」を存在論的に捉えようとするここでの本来の目的とは無関係な、別種の意図がその主張に含まれている時だけであるように思われる。畢竟するに、入不二は自らの所説を複数の言語ゲームの一つとして相対化させてしまう必要はなかったのである。すなわち、永井が〈私〉に関して徹底した唯一性の純化を求めれば求めるほど、逆にその純化に背く運動を、否定的なものとしてであれ、「独在性」に関わる看過できない要素として暗に認めているものと考えられるのである。したがって、入不二のように〈私〉に関する両方向性の運動を認めてゆくことは、この事態に対する率直な把握であり、また同時に、「独在性」に対する理解の基本的な根幹において永井の思考にそれほど背馳するものでもないように筆者には思われる。

脚注5) 実は、勝守自身が自らの著述<sup>9)</sup>の跋文と思われる箇所、〈私〉をめぐる認識論と存在論との間の相克の問題に触れている。しかし、その著述の本

文はここで述べたように認識論的な関心によって貫かれており、拙稿ではその本文の骨子に沿った紹介をしたことをここに断りたい。

もっとも、その一方で、他者に至る経路に関しては、入不二が行ったような「エロスの言語ゲーム」の記述の試みによっては決して開かれるものではないと思われる。なぜなら、「エロスの言語ゲーム」の場に現れるとされる、先に述べた、他者の「高次の固有性」、私の「高次の固有性」、他者の「単独性」といった各々は、「エロスの言語ゲーム」の記述によって得られるものではなく、まさしく「エロスの言語ゲーム」という概念の構成要素そのものであるように思われるからである。もし仮に、「エロスの言語ゲーム」と呼ばれるべき言語ゲームがまじがいなく機能しているのであれば、その実相を記述する作業は可能であろう。しかし、そのような言語ゲームが成立しているか否かという最も重要な問題は等閑視されたまま、そこに提出された「エロスの言語ゲーム」の内容だけが披露されていることは間違いない。したがって、ここでの目標点とも思われる他者の「単独性」は、それが帰結するようにはじめから「エロスの言語ゲーム」の概念の中に盛り込まれていたことになる。あくまで、われわれの当面の関心は他者における〈私〉が正統な根拠をもって成立するか否かという問題であり、われわれの目的に対して入不二がとった試みが寄与することはないように思われる。

以上のように、カプグラ症候群を他の〈私〉の変更としてとらえる上で、その前提となる他の〈私〉が存立しうるものが、これまでの永井に対する批判的論考によっては十分な根拠を持って確保されているとはいえないように思われる。しかし、ここまでの議論によってわれわれは先の入不二から重要な示唆を得たと思われる。それは、唯一性に関する両方向性の運動を惹起する〈私〉のもつ「中間的・二重的」な特性である。そして、〈私〉のもつこのような特性については入不二から重要な示唆を得つつも、一方で、われわれは他者へと至る経路は入不二とは異なる経路をとりたい。それは、実は「〈私〉の同一性」に関する問題を基点とする経路であり、次章からはその経路について述べてゆくことになる。

(続く)

## 文 献

- 1) 入不二基義：「私」・他者・エロスの言語ゲーム。武蔵大学人文学会雑誌，23：31-64，1992。
- 2) Irifuji, M.: From De Se to De Me-On the Singular Self Hidden in the Irreducibility Thesis of De Se. 武蔵大学人文学会雑誌，24：1-22，1993。
- 3) 入不二基義：独我論の語り方—永井均氏の「独在性の意味(二)」後半への応答。山口大学教養部紀要人文科学編，28：1-11，1995。
- 4) Kaplan, D.: On the Logic of Demonstratives. Journal of Philosophical Logic, 8：81-98，1981。
- 5) 勝守真：他者の語りとしての〈私〉論—永井独我論の脱構築。現代思想（青土社），1月号：323-333，1998。
- 6) 勝守真：他者の語りとしての〈私〉論—永井独我論の脱構築（承前）。現代思想（青土社），3月号：297-309，1998。
- 7) 森岡正博：この宇宙にひとりだけ特殊な形で存在することの意味—「独在性」哲学批判序説—。自己と他者（池上哲司他編），pp.110-135，昭和堂，京都，1994。
- 8) 永井均：〈私〉のメタフィジックス。勁草書房，東京，1986。
- 9) 永井均：〈魂〉に対する態度。勁草書房，東京，1991。
- 10) 永井均：〈私〉の存在の比類なき。勁草書房，東京，1998。
- 11) 永井均：転校生とブラック・ジャック—独在性をめぐるセミナー—。岩波書店，東京，2001。
- 12) 新山喜嗣：Capgras 症状と私の同一性—属性を欠如する「このもの性」の視点から—。臨床精神病理，22：129-145，2001。
- 13) 新山喜嗣：Capgras 症状と可能世界—本物とにせものが存在する場所—。精神経誌，106：281-303，2004。
- 14) 大庭健：権力とはどんな力か。勁草書房，東京，1995。
- 15) Salmon, N. U.: How not to derive essentialism from the theory of reference. The Journal of Philosophy, 76：703-725，1979。
- 16) Wittgenstein, L.: Philosophische Untersuchungen. Basil Blackwell, Oxford, 1953. (藤本隆志訳：哲学探究。ウィットゲンシュタイン全集8，大修館書店，東京，1976.)
- 17) 山田友幸：他者とは何か。ウィットゲンシュタイン以後（飯田隆，土屋俊編），pp.43-68，東京大学出版会，東京，1998。



Capgras Syndrome and Nagai's Theory of the 〈I〉 (Part 1)  
— Has the 〈I〉 in the Other been Secured in  
Criticisms against the 〈I〉 Theory? —

Yoshitsugu NIYAMA

Course of Occupational Therapy, School of Health Sciences, Akita University

In the previous papers, the author attempted to define the very nature of Capgras syndrome as a change of the 〈I〉 that has only haecceity. In those papers, the discussion did not fully look into the question as to whether or not such 〈I〉 can ever exist in the other. In this paper, the author examines the question of the existence of the 〈I〉 in the other, which should be a prerequisite for the definition of Capgras syndrome, and then discusses what the change of the 〈I〉 means when viewed from an ontological perspective.

First, the author introduces the well-known theory of Hitoshi Nagai—the first researcher to propose the 〈I〉 concept in which he rules out the existence of the 〈I〉 in the other. According to Nagai's theory, the 〈I〉 is nothing but uniqueness possessed only by one's own self, and is not allowed to be generalized to the uniqueness possessed by anyone else. Thus, it is impossible that the other shares the 〈I〉 in common. The author refers to three advocates who hold negative views on Nagai's theory on the other. However, it seems that those advocates failed to plausibly demonstrate the existence of the 〈I〉 in the other. As a result, it is necessary to look for new ground for the existence of the 〈I〉 in the other from a different point of view.